

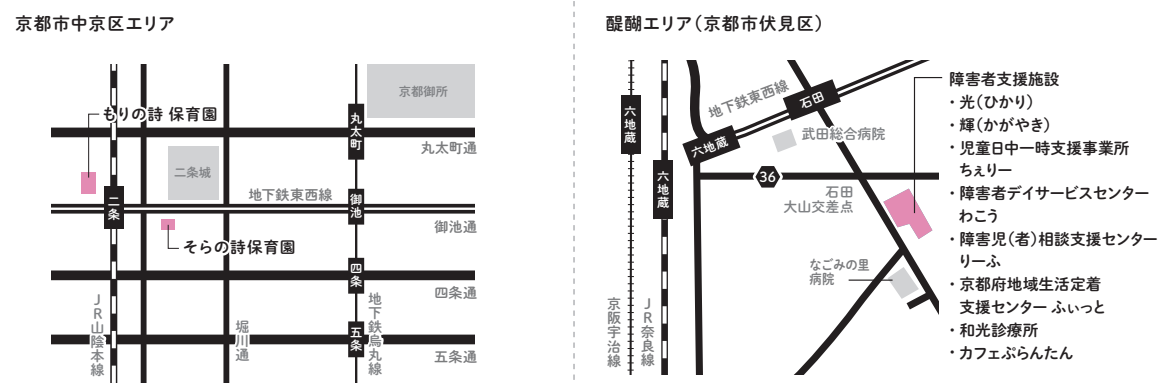


編集後記

今号は「災害時における福祉的な支援」をテーマにお送りしました。テーマと向き合う編集部からのそれぞれのコメントを、編集後記とさせていただきます。

災害時の福祉的支援には、平時からの「つながり」が欠かせません。前号の「孤立・孤独対策」と同様、日頃の関係づくりが、いざというときの支えになります。地域の中で「顔の見える関係」を育むことが、誰も取り残さない支援につながることをあらためて実感しました。(T.O.)

私の住んでいる地域は高齢者の世帯が多く、私は数年前から自治会の「近隣高齢者の見守り隊」に登録しています。これからは、若い世帯の地域住民も巻き込んで、みんなが防災や災害時の助け合いを「自分ごと」として考えられるような取り組みがもっと必要だと感じています。(A.5.)



特集

災害時における福祉的な支援のあり方を考える

自然災害が頻発化・大規模化する中で、平時から災害に備え、被災者に寄り添った支援が求められています。また、過去の大規模災害の教訓等を踏まえ、災害時における福祉的な支援の充実を図るため、災害対策基本法等の改正が行われました。

こうした中で、南山城学園では、これまで社会福祉法人として培ってきた専門性やノウハウを活かし、災害支援の取り組みを展開してきました。

そこで、今回は社会福祉法人の強みを活かした南山城学園の災害時における福祉的な支援についてご紹介します。

南山城学園の福祉避難所

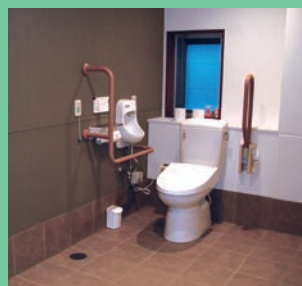
南山城学園では、「醍醐和光多目的ホール」（京都市伏見区）と多目的活動棟「彩雲館」（城陽市）の2つの施設が、それぞれ京都市と城陽市より福祉避難所として指定されています。

大規模な災害が起きて、避難勧告が発令されたら、小学校や公民館など指定の避難所に避難することが求められています。その中で高齢者や障害者、妊産婦、乳幼児、病弱者など、特別な配慮が必要な方が、より安心して過ごせるよう、一般の避難所とは別に設置されているのが「福祉避難所」です。竣工から10年が経過し、福祉避難所の機能を備える「彩雲館」は、災害時要援護者の方々が安心して安全に避難所生活ができるよう、館内の1階はバリアフリーになっており、オストメイト対応の多機能トイレや冬季に備えて床暖房機能が設備されています。また、ライフライン停止時に、3日程度の

福祉避難所の機能を備える「彩雲館」の設備

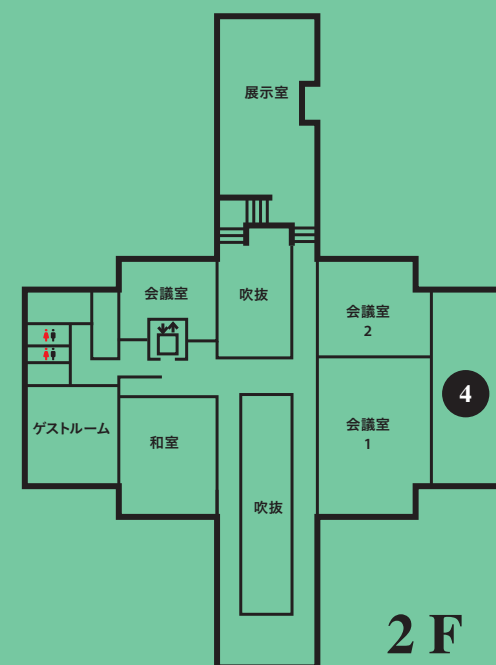
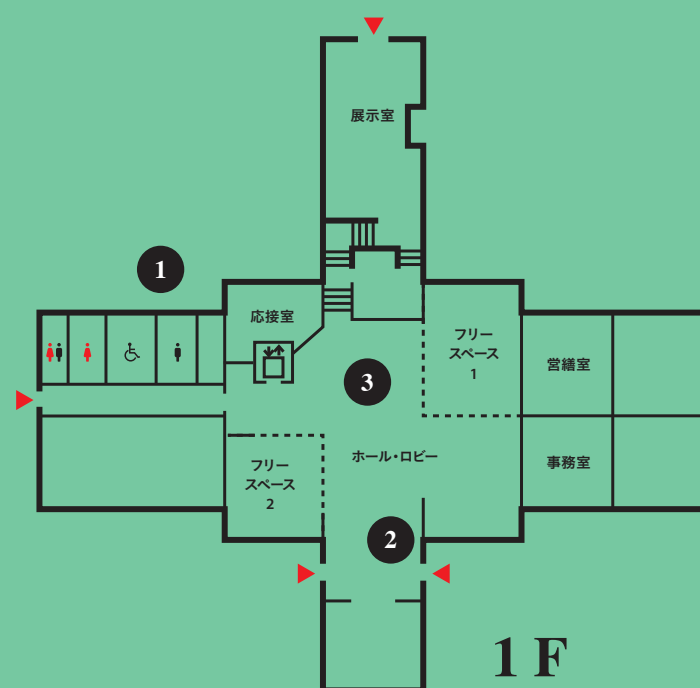
1 オストメイト対応の多機能トイレ

障害者や高齢者、小さな子ども連れの方でも利用ができることはもちろん、オストメイトの方も利用できるようになっています。



2 太陽光発電設備

ライフライン停止時に、3日程度の電力を供給できるようにしています。（現在の発電量も確認できます）



3 バリアフリー構造（床暖房）

館内の1階は、バリアフリーになっており、冬季に備えて床暖房機能の設備もあります。



4 備蓄食、災害用品

避難者用として約800名分×3日分の食料を備えています。様々な方が来られることを想定し、柔らかい食事の非常食も備えています。



電力を供給できるよう太陽光発電設備が設置されています。備蓄食、災害用品も、城陽エリアとして約800名分×3日分の食料、水などが備蓄されています（「醍醐和光多目的ホール」がある醍醐エリアでは約230名分×3日分が備蓄されています）。

南山城学園の災害対策体制「大規模災害部会」

南山城学園では、法人全体のリスクマネジメント体制の一環として、「大規模災害部会」を設置しています。災害時における利用者様や職員の安全確保と、地域社会への福祉的支援の強化を目的としています。主なメンバーは各エリア管理職、DWAT（災害派遣福祉チーム）メンバー、管理栄養士、法人本部から構成されています。

南山城学園が持つ専門性やノウハウ、ネットワーク等を活用し、地域のさまざまな関係者・団体と連携・協働を図りながら、災害時

の利用者様の安全確保と、法人の事業継続が実現できる体制を目指します。

また、「大規模災害部会」では、災害時対応マニュアルに基づき、大規模地震が発生したことを想定した災害発生時職員参集訓練を実施し、福祉避難所の開設に向けた課題の洗い出しやBCP（事業継続計画）・マニュアルの改善に向けた課題の整理を行っています。

避難訓練の様子



被災地に 寄り添った支援

南山城学園では、社会福祉法人が持つ専門性やノウハウ、ネットワーク等を活用し、被災地に寄り添った福祉的支援を展開しています。

京都府災害派遣福祉チーム（京都DWAT）の派遣による人的支援

南山城学園では、平成23年6月に東日本大震災の復興支援として、全国社会福祉法人経営者協議会を通して職員を被災地に派遣しました。続いて、平成24年の京都府南部豪雨、平成25年の台風18号災害に職員ボランティアチームを



結成し、現地支援に職員を派遣してきました。

平成28年の京都DWAT（災害派遣福祉チーム）発足と同時に職員登録を行い、現在では職員14名が登録しています。

京都DWATのメンバーとしては、平成28年の熊本地震、平成30年の西日本豪雨災害への支援派遣をはじめ、令和6年の能登半島地震の災害支援に職員を派遣し、南山城学園が培ってきた専門性やノウハウ等を発揮し、被災地に寄り添った福祉的支援を展開してきました。

なお、今回の法改正では、DWATの活動範囲の拡大が図られており、これまで以上に京都DWATとして派遣を経験した南山城学園の職員の専門性の発揮が期待されます。

備蓄品の提供による物的支援

令和6年能登半島地震では、福祉避難所として指定されている「彩雲館」に備蓄しているレトル

地域とともに 平時から備える

南山城学園では、地域のさまざまな関係者と連携・協働しながら、平時から災害に備えた取り組みを実施しています。

こども食堂で防災体験

こども食堂「ダイニングあんざんぶるわこう」では、「防災」をテーマに、子どもたちと一緒に、災害に備えた非常食の試食や、避難所での段ボールベッドの組み立てを体験しました。こども食堂を通じて、気軽に楽しみながら、防災意識を高めています。



すぐろくで防災を学ぶ

「もりの詩保育園」では、京都光華女子大学災害支援サークル彩華（いろは）の学生たちが、自作の「防災すぐろく」を活用して楽しく遊びながら、園児たちに防災について学ぶ機会を提供していただきました。

京都子ども記者クラブと合同で福祉避難所のシミュレーション体験

一般社団法人京都子ども記者クラブと合同で、小学5年から中学2年生の子どもたちが記者として福祉避難所開設をシミュレーション体験できる場やDWATにつ



ト食品や紙パンツ等を、地震発生3日後に、佛教大学福祉教育開発センターの後藤至功先生を通じて、被災された皆さまに救援物資をお届けしました。



物的支援

DWAT（災害派遣福祉チーム）とは

DWAT（Disaster Welfare Assistance Team 災害派遣福祉チーム）とは、災害時に被災地へ福祉の専門職で構成されるチームを派遣し、避難所や福祉避難所で高齢者や障害者、子ども、災害により要配慮者となられた方などへの福祉的支援を行う仕組み。

京都DWATは、平成26年度から京都府が福祉専門職の養成とチーム編成を進め、平成28年3月に発足。京都府内を8圏域に分けて12チームを編成し、社会福祉士や介護福祉士、ケアマネジャーなど約130～170人の専門職が登録。南山城学園も発足当初から、積極的に参画。

Message



京都DWAT発足当時の登録メンバーの一人
障害者支援施設 輝
副施設長 佐藤 走野

被災された方が生命の危機を脱した後には、生活課題への不安は想像できないほど大きいものです。課題解決の道と一緒に考えながら不安を希望に変えていくDWATの活動は、被災者の未来にとって必要不可欠です。そのうえで、「わたしたちDWATがいなくても支援できる、生活できる体制を皆でつくりあげる」という共通認識の下、活動しています。

これからも京都DWATの実働メンバーとして尽力していきたいですし、もっとDWATの活動が広まり、実働できるチームが増えていってほしいです。

社会福祉士RO.Sちゃんねる
に佐藤副施設長が登場し、自身が参加するDWATについて熱く語っています。



Message



南山城学園
大規模災害部会 座長
吉岡 弘樹
福祉事務局次長
兼 障害者支援施設 輝
施設長

いて理解を深める場を企画、運営をしました。

京都府南部で震度7の地震が発生した想定のもと、福祉避難所開設時に必要となる高齢者・身体障害者・知的障害者への聞き取りなどを子どもたちが行い、その難しさや大切さを体験しました。



大規模災害部会は、平成25年の発足から12年が経過し、災害対応体制の強化と見直しが必要になってきています。

南海トラフ地震など切迫する大規模災害への備えとして、社会構造の変化を踏まえ、災害対応マニュアルやBCPの定期的な見直しとアップデートを行い、被害想定や対応手順の検証・強化を進めていく必要があります。

まずは、非常電源用の自家発電設備を各事業所に設置、トイレなど水回りの設備についても整備を進め、災害時のライフラインをしっかりと支えられる体制を整えていきます。さらに各事業所に防災士や災害対策士の資格を持った職員を配置し、事業所ごとの防災や災害時支援の取り組みを推進していきます。

こうした取り組みは、法人内のさまざまな部署と協力しながら進めていきますが、職員一人ひとりが「自分ごと」として防災を意識していくことがとても大切だと考えています。

災害時における福祉的な支援の展開と南山城学園への期待

災害時における福祉的な支援の展開と南山城学園への期待について、社会福祉法人・福祉施設の災害支援が専門の天理大学の北垣智基准教授にお話を伺いました。

Interview



天理大学
北垣 智基 准教授

社会福祉法人に求められる災害時の役割とはどのようなものでしょうか。

社会福祉法人には、平時から支援を必要とされる方への支援を災害時においても継続していくことが求められます。そこで重要となるのが、BCP（事業継続計画）で

す。南山城学園においても、工夫を凝らしたBCPが策定されていますが、今後は、そのBCPをいかに実効性のあるものにしていくことが大きな課題です。

そのためには、BCPに基づく研修や訓練を実施し、BCPの見直しを行うとともに、BCPに基づいて適確かつ迅速に「動ける」組織づくりを行う「BCM（事業継続マネジメント）」を継続的に行うことが求められます。

それと同時に、社会福祉法人には、地域住民の方々への支援や、災害によって生じる新たな福祉的ニーズに対応していくことも求められます。災害時のスムーズな助け合いを実現するためにも、平時から、地域住民の方々との関係づくりを行っておくことが重要となります。

南山城学園も福祉避難所の指定を受けていますが、全国的に福祉避難所が地域の中で十分に認知さ

れていないという課題があります。南山城学園では、地域に向けた「彩雲祭」を開催したり、地域住民の方々と一緒に避難訓練に取り組まれています。今後は、こうした広報活動の取り組みが重要となります。

加えて、社会福祉法人には、被災地における支援の最前線にいる立場から、災害時における人権問題や権利擁護について、広く社会に訴えていく役割が求められるのではないのでしょうか。

災害時における南山城学園への期待をお聞かせください。

すでに福祉避難所の指定や災害派遣福祉チーム（DWAT）への派遣による人的支援、被災地への備蓄品の提供による物的支援など、さまざまな取り組みを実施されていますが、今後は、こうした取り組みを更に発展させていくことが重要ではないのでしょうか。

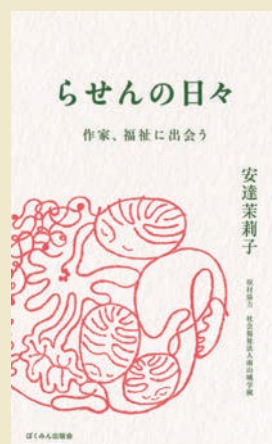
さらに、南山城学園は、「ほんず活動」（伝統産業の継承）や「KOUFUKU（工・福）連携」など、先駆的な取り組みを実践されています。こうした「先駆性」を、災害支援においても発揮していただき、全国モデルとなるような取り組みを提案していただきたいと思っています。

避難訓練の様子



Information

書籍『らせんの日々ー作家、福祉に出会う』への取材協力



社会福祉法人南山城学園の創立60周年を迎えるにあたり、南山城学園が取材協力した作家 安達茉莉子氏による書籍『らせんの日々ー作家、福祉に出会う』（ぼくみん出版会）が出版されました。

本書は、南山城学園への潜入取材を通じて得た貴重な経験をもとに、福祉の現場で働く職員たちの語りを通して、福祉の本質とその魅力を描いたエッセイです。安達茉莉子氏の作風である、温かく人間味あふれる筆致で、日々の小さな幸せや人々の心のつながりが丁寧に描かれています。



『らせんの日々ー作家、福祉に出会う』
価格1,800円（税抜） ISBN 9784911495001

NEW FACE

令和7年度 新規採用総合職職員研修出席者

令和7年度は41名のフレッシュな新規採用職員（総合職）が入職しました。福祉に対する熱意と志を胸に、新たな一歩を踏み出します。

